

# 介護に携わる喜び

執筆者	地域密着型サービス事業所職員	男性	33歳
	地域密着型サービス事業所職員	女性	26歳
	特別養護老人ホーム職員	女性	62歳
	特別養護老人ホーム職員	男性	32歳
	特別養護老人ホーム職員	女性	25歳
	特別養護老人ホーム職員	男性	32歳
	特別養護老人ホーム職員	男性	33歳

- 私は小規模多機能ホームの職員で、認知症の高齢者のお世話をしています。

ある日、利用者のお一人が新聞の切り抜きをもってきて「この場所、いいでしょ？連れて行ってよ！」と言いました。そこには鮮やかなピンクのじゅうたんを彷彿させる芝桜が写っており、彼のそのときの表情は楽しいことに向かっていく期待感に満ちていました。さっそく行動に移すことにして、希望者を募って出かけてみました。土手に広がる美しい芝桜に、普段は遠慮深く「〇〇がしたい」というような要望をなかなか言ってもらえない他の利用者の方からも口々に「また来たいね」と声があがったのです。

お年寄りの「〇〇がしたい」という気持ちを言葉に表してもらうのはなかなか難しい。とくに認知症の方にとっては自己表現は至難の技であり、寄り添い、共感し、馴染みの関係をつくることの大切さをつくづく考えさせられます。

介護という仕事の捉え方は、人それぞれで違う、十人十色の考え方があっていいものだと思います。まして、100パーセントの介護などというものはあり得ないだろうし。ただ決められた時間内で漠然と仕事をこなしているだけでは、なんだか味気ない。お年寄りの発した言葉の中に隠された本当の意味を探し、それをもとにその方の気持ちに近づくことができる。恥ずかしながらこれが私の理念であります。

以前、お年寄りの「〇〇したい」という気持ちを形にしたくて、夜遅くまでスタッフと行事の案を練ったことがあります。計画を立てている間も「楽しかった」「また今度も」と笑顔で言われることを頭に思い浮かべながら。そしてそれが実現できたとき、私たちも大きな喜びを分かち合うことができます。

お年寄りの気持ちと私たちの気持ちが交わる中で、お互いの喜びを発見することができます。私はほんとにやりがいのある仕事だと思っています。

【地域密着型サービス事業所職員 匿名 男性33歳】

- グループホームで働いて5年が経った。

保育士の短大を出、介護の専門学校を経て、今の職場に就いた。正直、祖父母と暮らしていない私は、おじいちゃんおばあちゃんが大好きでこの職に就いた訳でない。保育士の夢を諦めた時、「世話をする」「面倒を見る」ならお年寄りでもいいかなという軽い気持ちでこの世界に入った。兄弟の面倒を見ていたせい、排泄物にも抵抗がなくすん

なり入れた。そんな風に入った世界で5年も居ることができたのは、魅力があったからだと思う。

お年寄りと生活する中で一番悲しいことは、「老い」を感じ、見ることである。しかし、老いていくのでもただ老いるのではなく、少しでも「楽しいと思える瞬間」があるのではないのでは大きな違いがあると私は思う。その瞬間を作れるのは、家族はもちろんこの介護職でもあると思う。日々の生活の中で1人1人と関わっていくと、それぞれの笑顔を見ることが出来る。在宅で暮らしていた中でも、認知症のために常に不安を抱えて暮らしていただろうお年寄り。そんなお年寄りがグループホームに入所し少しずつ心を開いてくれる。もちろん、すんなり行くわけではない。まだ若かった私は、幾度となくおばあちゃん達に試され、何度もやめようと思った。しかし、介護していく中で知る生活の知恵の素晴らしさや、何よりお年寄りのありがとうという「笑顔」を見て、辞めたらもったいないと思うようになった。周りの介護職員のアドバイスもあり、考え方を換え接するようにしていったところ、相手の立場に立って接することが出来るようになった。ただ介助するのではなく、冗談を言いながら接することで拒否されていた介助も笑いながら行なえた。お年寄りが笑顔になるために、薬の見直し、家族との交流を増やした。1人が笑顔になると、周りの人も笑顔になる。なにより自分が嬉しくなる。自分が関わることで笑顔になる瞬間が増えていくことを実感でき、この職の喜びを感じた。だから、今まで続けられたと思う。これからも、「笑顔になる瞬間」を沢山作るよう、お年寄りも自分も笑顔で暮らしていこうと思う。

【地域密着型サービス事業所職員 匿名 女性26歳】

- 一主婦で何の技術も持たない私が、現在勤めている特養で介護の仕事始めて22年になります。未知の仕事想像しワクワクしながら面接を受けた日のことが昨日のように思い出されます。新人研修では、排泄・食事・入浴の実習、認知症の方への処遇は泊り込みで介護の基本を教わりました。職場では日々接する利用者さんが、表情や行動で気づきを教えてください、成長させてくださいます。物言えず訴えることもままならない障害をお持ちの方が発する信号をキャッチし、それに応えられた時「ありがとう」という返信が得られる。この仕事に携わっているからこそ味わえる喜びがそこにあるのだと思っています。

ある年、体調を崩し休職中、利用者Wさんから、リンゴ2個と笹飴「これを食べて元気になって早く帰ってきてね」同僚が伝言を添えて届けてくれました。こんな私を頼りに思っていてくださる人がいる。そのような経験と感動が自分を奮い立たせる糧となり今まで頑張ってきたのだと思います。また、そのような経験以外にも、私自身の家族の協力、共に汗した同僚との絆、職場に華を添えてくださるボランティアさんに有形無形の支えもいただきました。

利用者さんに対して、家族の愛情には及ばないけれど、その人らしい生活の下支えを担っているという自負を持ち利用者さんと向き合う日が続いています。迷いがあって決断できない時、立ち止まり「利用者さんにとってこのことはどうなんだろう」と自問することで不思議とその場を乗り切れてきました。

今、私の周りには、外国人でこの道を選び飛び込んできた同僚が何名かいます。優し

い眼差しや仕草により言葉のハンディを見事に乗り越えて利用者さんからの信頼を獲得しています。私も長く介護の仕事に携わってきましたが、まだまだ新鮮な刺激を受けながら、更なる向上を目指してこの仕事を続けて行きたいと思っています。

**【特別養護老人ホーム職員 匿名 女性62歳】**

- 「えー！」っと叫んでから一年後、今の施設で働いていた。

幼い頃から気になっていた。私の母親は障害者で両耳の聴力が弱い。昔住んでいた家が福祉施設に近く、訪ねると利用者と混ぜて遊ばせてくれた。そんな環境の中で育った為福祉について感心があったのだと思う。

26歳頃、会社員だった私は、いい顔して愛想笑いをし、嫌われないように回りの目を気にしながら仕事に明け暮れていた。

そんな矢先、滅多にない平日休みに家でボーとしていると、同居していた祖母がデイサービスのバスに乗り込む姿を見た。後で尋ねると老人ホームに通っていると聞かされ「エー！」と思わず叫んだ。決定的瞬間だった。

そのデイサービスのバスに乗っている人達は、皆明るく楽しそうで、祖母も笑って会話をしているではないか。その頃は人との関わり方を模索していた時期で、一人で全国をバイクで旅したり、海外旅行にも行ってみた。行く先々で見知らぬ人と積極的に会話をした。

何故か、見知らぬ人とは正直に何でも話せた。そして旅をしながら「普通の会話したい。人として関わりたい。」「あの時祖母を迎えに来ていた人達と仕事をしてみたい。」との思いが強くなっていった。

一頻り旅を終えた私は、特養で働き始めた。

介護を始めた当初、私を全く受け入れてくれない利用者がいた。ベテランワーカーの名前を呼び、「あなたじゃだめ」と言われ続けた。それでも普通に（一方的に？）会話し、介助していたら、半年程経った頃、「少しはできる様になったわね。」と突然心を開いてくれた。私は笑っていた。・・・しかも自然に。そして心の底から喜びを覚えた。

「この人は入って間もない私をずっと見てくれていた。」と思うと感慨深く、この時介護の仕事の楽しさ、素晴らしさを始めて知ることができた。

私の過去なんて知らない利用者が、「今」の自分を受け入れてくれ、利用者が「今」を話してくれる。追い求めていた「普通の会話、人としての関わりあい、明るく楽しい仕事」が今できていることに喜びを感じる。

**【特別養護老人ホーム職員 匿名 男性32歳】**

- この仕事に就こうと思ったきっかけは、病院に入院してからの祖母の変化でした。お見舞いに行くごとに家族の名前を忘れてたり、会話が成り立たなくなったりという症状が現れていました。

退院後、老人ホームに入所した祖母は徐々に表情も豊かに。会話が成り立つようになって次のように話しました。

「リハビリを頑張っているのよ。肩はまだ上がらないけど、介護してくれる人のお陰でいろいろ出来るようになった。」と自慢そうに習字を見せ嬉しそうにしていました。

この時、私もそのようなことをしたいと決め、この仕事を選びました。

老人ホームに勤めて5年。寝たきりの方や意思疎通が困難な方もおられました。話しかけてもハッキリした返事のないことに戸惑いながらも些細な表情の変化や動きなどから、表現を感じ取れるようになりました。

無言で笑って返してくださる笑顔、私も嬉しくなり笑ってしまう瞬間。笑顔の連鎖に、やわらかで穏やかなつながりを感じながら過ごす時間は喜びの瞬間です。またご自分で出来ないことをそばで見守り、少し手を添えてあげることで安心感に繋がるのか出来るようになります。

働いてみたいへんさを知るとともに、お年寄りが楽しんでおられる様子を見ると、この仕事に携われたことを嬉しく思います。介護士の必要性和やりがいを実感します。

私の何倍も生きて来られた多くの方々と接する中で、会話から学ぶことや出会えたことの一つひとつが大切なものになっています。

**【特別養護老人ホーム職員 匿名 女性25歳】**

- 「介護の仕事」とはどんな事をしているの？と漠然とわかっているけど実際携わってみないと見えてこない面があるかと思います。一般的には介助を必要とされるご高齢者へのお手伝いがメインになりますが、実際はお年寄りと「遊んでいる」という方が適しているのかもしれませんが。生活には必要である「食事」「排泄」「入浴」などの介助があっても、一番大切なのはコミュニケーションをとる事や楽しんで生活して頂く事が重点となり、その達成には私たち介助者も楽しみながら接していく事が大切です。

ご高齢者にとって将来の事や健康状態、又、自分の存在価値など様々な不安を抱いて生活していますが、今、この瞬間の楽しみを感じて頂く事で「不安」から「生きがい」へと変えられます。楽しみとは、自然と笑顔が生まれる瞬間でありこの瞬間こそが介護職の味わいでもあります。一緒に歌を歌ったり、買い物に出かけたり、世間話をして笑ったり、とプライベートでおじいちゃん、おばあちゃんと接している時間の延長として介護職があるように感じる事があります。時にはお菓子を食べながらお話をしてみたり、桜を見に行き行って単純に「きれいだね」と共感したり、ファミリーレストランで一緒に食事をしてみたり、とこれを楽しい仕事と思う事が出来れば、毎日遊んでいるのにこれが仕事！？と感じる事もあります。又、お年寄りからは様々な事を教えられ、とても勉強になる事で自分自身の人間としてのスキルアップにも繋がってきます。

介護の仕事はお年寄りを楽しませて生きがいを持って頂く、という事に趣をおくならば、介護職は楽しい＝好きになる事が大切です。実際、介護の仕事は好きでないと出来ない仕事だと思います。その反面、介護の仕事に嵌ってしまうと別の世界（仕事）は出来なくなるくらいやりがいを感じます。仕事なのに大声で笑ったり出来る瞬間、こんなに楽しい仕事があるんだなと実感します。

**【特別養護老人ホーム職員 匿名 男性32歳】**

- 介護に対する喜び、やりがいとは何かを日々考える。目的、収入、ポリシーそれぞれ職員個々に違いがある。私自身にとってのそれは、貢献ではなかろうか。社会全般に対する仕事の価値、自身が社会生活における役割、意義において、介護を通じて貢献す

ることは、一様に評価することは難しい。しかし、利用者本人や家族から感謝される機会の多さがそれを物語るのではなかろうか。

介護というサービスを需要する側と供給する側ではそれに対する意識は異なる。ただ、漠然と認識するのではなく、個々が消費者、提供者としてのスタンスにこだわることも必要と考える。サービスを受ける側はその質に、また提供者はプロとしての意識にこだわるのが、自身の介護への精神面、技術面を向上するためのモチベーションとなると考える。ものづくりではなく、自身の介護がひとつのサービスとして確立されてこそ、介護者冥利につきるのではないか。

福祉業界をとりまく、介護報酬、賃金水準の引き上げは、介護職員としての生活の基盤を支える、物理的な要因である。ただ、その要因と介護職の有様、質、量と同等にみること疑問を抱く。生活の基盤が安定せずして、心の平安も得られないと感じることもあるが、はたしてそうなのか。何のために働くかを日々自身に問う。なぜではなく、何のためにかである。

介護職の社会的地位向上もさることながら、介護職が提供するサービスを必要としている多くの方々がすぐそこにいることを感じる。その求めに対し提供するサービスが決して恥かしいものではなく、誠心誠意、切磋琢磨した自身の介護サービスを提供でき、それへの利用者や家族からの温かい言葉はなにものにも代え難い。自身が今日、大きな社会の一端を担える喜び、介護というサービス媒体を介しそれを時々ではあるが感じられることを幸せと思い、また誇りと感じる一瞬である。

**【特別養護老人ホーム職員 匿名 男性33歳】**